

熟年俳句誌

10 2013年
月 号

かたね

ふ



黒羽集

(二十一)

佐藤喜仙

花菖蒲見舟にちるや小座布団

郭公のこゑのしみこむ尾瀬の水

岩窟にをさまる社滴れる

血のごとき天草沖の夕焼かな

クロといふ半野良の死や菊の供花



片蔭のうすき時間の外出かな

鵜縄いま意思ある縄に水を統ぶ

花カンナ頻繁に聞く消防車

緑陰に坐る定位置ありにけり

打水や迎へいれたる猫二匹

日盛やどこへ行くにも道遠し

電柱の影に身をいれ汗ぬぐふ

かさね集

白選句集



「水母」

松本周二

下駄箱の上鰐広の夏帽子

花生けの竹筒青し夏座敷

月の夜の水母になりて漂はむ

怪獣の指かくあらむゴーヤの実

捨てられし屋敷にさびし月見草

風吹けど知らぬ顔して眠り草

「蚊遣香」

古川千鶴

炎天や南斜面の発電板

網繕ふ苔屋の傍に蚊遣香

炎昼の海女小屋は留守日めぐり反る

紙魚走る姑の手擦れの古浄瑠璃

学童の育てし巻貝螢の夜

緋毛せん膝を詰め合ひ水羊羹

「新居」

川井素山

三月過ぎ馴染む新居や蚊遣香
突堤に日暮れて集う残暑かな
ビヤホール艶冶な姿の二人連れ
峨々とした山重なりて夏深し
大海原間切りて進むヨットかな
川床涼み闇深くなり宴猛る

「梅」

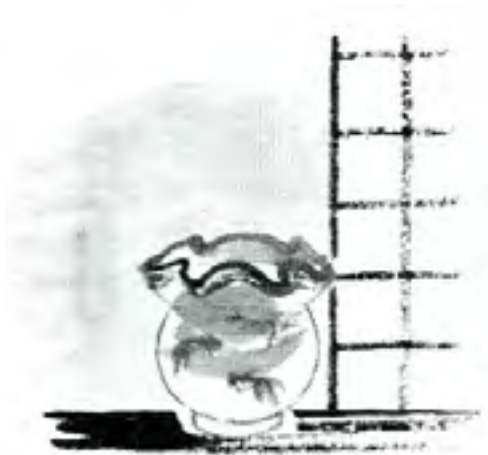
安藤虎酔

授かりし破魔矢掲げて雑踏に
初午や屋敷稻荷の幟旗
寺の庭梅源平に競ひ咲く
白梅の気品思はず歩を留めし
咲き分けの紅白梅の古木なる
床の間の盆梅賞でて一日暮れ

「涼風」

田島昭久

護摩を焚く僧の読経の終るまで
涼風やあはれ落蟬道の端
花芙蓉朱の大輪は塀に沿ひ
一族と行く墓参り丘の上
櫨の葉は二枚早くも紅葉す
涼風や野道歩きて花を摘む



撫子集

主宰選



長久保郁子

老舗宿ひつそり閉ぢて夏盛り

山本草風

夏の原名もなき草のはびこりて

蓮咲いて鯉の跳躍城下町

夕暮れに涼風流れ赤とんぼ

夏の道汗と吐息の人の群れ

一本の道の記憶に青大将

夜の更けて虫養ひのすもも剥く

丹田に力を入るる炎天下

その上の遠流の地なり沙羅の花

一枚の皮膚に露命のつつまるる

小池清司

鈴虫の音色を背に夕餉かな

青木英林

しやしやしきと鱧切る音や片櫛

胸のマーク泥に塗れて夏終る

秋茄子嫁の手に為る一夜漬

托鉢の饅頭笠や霧深し

星流れシユラフの中の祈りかな

街中の人の出淋し残暑かな

秋暑しドアは手動のローカル線

大玉の西瓜弾いて買ひにけり

百日紅しばし見ぬ間に又盛り

大山の尾根くつきりと秋近し

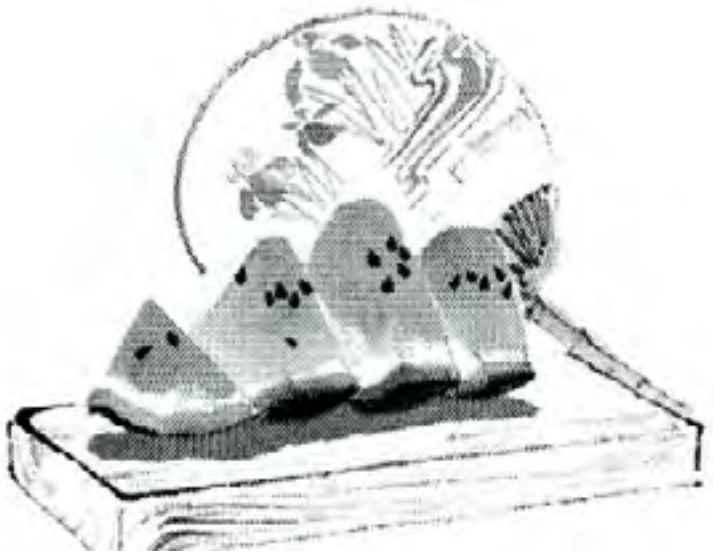
岡野安雅

のつぺりと百済観音秋近し

大安の漬物食べて秋近し

鐘を撞く小さき子等や原爆忌

出発を見送るホーム夕月夜



那須野集

主宰選



湯上りにオンザロックや夜の秋

丸山酔宵子

古家の奥の間昏し盆灯籠

池内とほる

風薫る追分の空夕こころ

風にのる花火の遠音一人酒

片蔭に入りて見上ぐる空眩し

单身者社宅住まひや秋暑し

夕立ち来てのれんくぐれば一会の酒

縁台に風を誘ひてよしずばり

無人駅昼顔絡む網フェンス

苦瓜の採り忘れては鳥の餌

大仏も汗拭くやうな極暑かな

田中清秀

店先の木賊涼しや甘味店

和田勝信

山鳩の声も途切るる油照

武士の墓に人なし蟬時雨

稚児の引く山車を囲みて父と母

夏蝶の花に動かぬ昼下り

片蔭を拾ひて老女歩が弛み

孟宗の幹の落書き夏終はる

油照貸舟の底並びをり

若竹の天へと競ふ芯の先

練り歩く氏子の額秋暑し

小柳千美子

蝉の幼虫登る力の高さかな

柳田皓一

すれちがふ幼のえくぼ紅芙蓉

山影に水音のあり天の川

門口にうごめいてゐる残暑かな

秋涼し牧場を分つ朝日影

炎天に光る世界の静けさや

喫茶店の客の出入や蝉時雨

朝顔のつるの絡んだ竹箒

森岡陽子

熱帯夜足で蹴飛ばす寝具かな

後藤克彦

午後のバス日影変りて席暑し

盆踊り急雨に消えし太鼓の音

花火待ちほおに微風と飯ひとつぶ

白雨やみぽとぽと雨垂れ潦

夏の月探し見上ぐる吟行会

秋暑し着替えの多き古稀のたび

白き腹灯影に照らふ守宮かな

橋本修平

夏富士に群がる人の蟻の如

長島清山

身じろぎもせぬ守宮ただ見据ゑをり

なるやうになれとすてばち冷奴

好き嫌ひ言うてをられぬ暑さかな

今年また暑さ厳しや終戦日

難しきことは勘弁この暑さ

都では紺碧の空広島忌
白髪に驚きの声帰省かな

迎へ火に手合せ拜む幼き児

吉田博行

湯の宿や家族集ひて避暑旅行

箱根路の湯宿を照らす夏の月

涼風の渡る湖面や関所跡

水を撒く柄杓の先も残暑かな



撫子集・那須野集鑑賞八月号より

客員 村上克哉

撫子集

盛塩に湿りの見ゆる梅雨の店

米田文彦

料理店、寄席など縁起を祝って店先や門口に丁寧につまみ上げたり、小皿に盛りつける盛塩は霧を吹き少し湿らせた方が崩れず形よく盛り上げられる。梅雨は地域によって多少ずれはあるが、6月10日前後から約一ヶ月降り続く、丁度梅の実が熟す頃のため「梅雨」と呼ぶが最近局地的な大雨の荒れ模様で、しとしとと降り続く傍題にあるような「梅雨じめり」「青梅雨」は少なく、店先の盛塩が湿るような趣は珍しくなった。

子燕の天こ盛りなる雨の駅

小池清司

燕は4月末から5月初め頃と6月から7月にかけて、一番子、二番子が一度に5羽ぐらい産まれる。

駅舎かホームの梁に営巣して、子燕が嘴を大きく開けて餌を求める姿は親しみが深く愛嬌がある。重なりあって巣からはみ出しそうな様は面白い、まさに天こ盛りだ。雨の駅だから梅雨の頃に産まれた二番子だろう。

木隠れの人待ち顔や夏帽子

長久保郁子

日焼けや熱中症などから身を守るためにかぶる夏帽子には、麦稈帽子、パナマ帽などがある。近年カンカン帽は見かけなくなった。最近は恰好のいい麦稈帽の若者やファッションとして用いる女性も多くなった。木陰に隠れて人待ち顔は若い女性だろうか、「や」の切字を入れて句に広がり出て読者にいろいろと想像させる。

黄昏に蝙蝠の飛ぶ風呂帰り

青木英林

蝙蝠は鳥のように飛翔できる唯一の哺乳類、昼間は樹の洞や屋根裏などのねぐらに休眠し、蚊や甲虫などの小昆虫を捕食するが果実を主食とする種もある。

る。3月下旬冬眠から覚め初夏になると群れ飛ぶのが見られる。日没直後に捕食するため巣を出る。近年都会では殆んど見られなくなった、温泉郷の共同風呂からの夕暮れの帰り道だろうか、故郷の貰い風呂とも。薄暗い空に次から次と飛ぶのに気がついた、蝙蝠の生態が上手く詠まれた。

梅檀の花の豊かや寺詣

山本達人

我が国では古くから馴染みのある木でオウチは古名、センダンの名は千珠の意味で実のつきかたが数珠を連ねたように見えることからついたと言い、実の多く付いた様子を「千団子」と見立てたと言う説もある。四国、九州に自生するほか生長がはやく大木になるので街路樹や神社などに植えられている。5、6月頃若葉が開くなか白色の小花が多数咲く様は風情がある。寺詣は鬼子母神の千団子詣、梅檀講であるう。

どこまでも真直な道揚雲雀

岡野安雅

春の空へ舞い上がり終日囀っているように見えるので揚雲雀と言い、急に急降下してくるところから落雲雀とも言う。山野や麦畑、川原などに巣をつくりオスは空高く舞い上がり、害虫を食べる益鳥。どこまでも真っ直ぐに続く道は、北海道の原野か麦畑を貫く一直線の道路だろう。舞い上がる揚雲雀との取り合わせが妙。

「那須野集」

畦道や気がつけば青田の海の中 丸山酔宵子

田と田との境の畦道を辿って行くと田植が終わった苗はぐんぐん伸びて稲は生長し、青々とした青田になっている、夏の日本を代表する田園風景である。整然とした青田の稲葉を分けて風が吹き渡る、青田風、青田波と言う風情ある季語もある。畦道は何時か青田の海の中を行くように遙かに筑波山が望める。「青田の沖へ手を振るつひに両手振る」斉藤美規の句がある。

伝言板

1 第十九回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2013年7月12日(金)

14:00～17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室

③投句 当季雑詠 5句

④会費 1000円

2 第二十回本部句会

①日時 2013年8月9日(金)

14:00～17:00

その他事項は第十九回に同じ

3 第十九回吟行 (原則第四火曜日)

日時 2013年7月23日(火)

場所 清澄庭園

集合 大江戸線・半蔵門線

「清澄白川」改札出口 15時

句会場 庭園内「涼亭」

夕食 仕出し弁当・飲物を用意

出句数 囀目2句

費用 交通費・入園料各自負担、

句会場費・飲食代均等割り

(約5000円)

その他 句会終了後「納涼会」をお

こないます。(当日は満月)

申込 喜仙宛7月20日まで

(FAX又はTEL)

4 第二十回吟行

日時 2013年8月27日(火)

場所 井の頭公園

集合 JR中央線「吉祥寺駅南口」

改札出口 11時

句会場 未定

昼食 各自用意

出句数 囀目3句

費用 交通費各自負担。

詳細は次号にて

5 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」

欄がございますので、句評、近況報告、

ご意見などご自由にお寄せください。

なお友の会の皆さんは特別作品(十

句)、随筆、その他論文等をいつでも

投稿することができます。お待ちいた
しております。

会員募集

何時からでも「かさねの友」に
なれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者

は入会申し出の翌月より

12月まで月割りで納付

見本誌 400円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-7-5

かさね俳句会 佐藤喜仙

「かさね」俳句の基本

I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

② 有季の原則

原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を「表季語」と称する」

原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてははその語彙は季語とは見做さない」

原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喻に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無さがゆえに、季語とはみなさない」

③

文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

II

俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切

奈良七重七堂伽藍八重桜 芭蕉
三段切でも可 初蝶来何色と問ふ黄と答ふ 虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。
ルビは誌中では使用しない。

III

俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。